

不登校予防研究部 研究報告（概要）

研究主題 市内小中学校の不登校ゼロを目指して
～校内組織でのマッピングを活かした個別支援計画の作成～

概要説明

本研究部では、不登校傾向の児童・生徒が抱える問題を深く把握するために、行動や現象のみならず、その児童・生徒の感情や気持ちを考えるための一つの方法として、マッピングを活用し、個別支援計画を作成して、実際の支援に役立てることを柱に研究を進める。今年度は研究初年度にあたり、以下の二点について報告する。

- ①マッピングを活かした個別支援計画の作成手順
- ②事例をもとに、マッピングを活かした個別支援計画を作成・実施し、その効果の検証

本研究の<キーワード>

- マッピング ○個別支援計画 ○児童・生徒の感情・気持ち ○点数化 ○共感的理解
- カテゴリー化 ○セブncross法 ○2週間スパンの支援策 ○人間関係づくり
- 共通理解 ○チーム体制

I 研究主題

市内小中学校の不登校ゼロを目指して
～マッピングを活かした個別支援計画の作成～

II 主題設定の理由

1 不登校の定義

文部科学省では、「不登校児童・生徒」とは「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義している。

2 所沢市の不登校の現状

所沢市では、小学校はわずかではあるが減少している。これは、昨年度までの不登校児童・生徒への対応研究部及び市内の各小学校の取り組みの成果が表れた結果だといえる。しかし、中学校では依然として不登校は増加している。小学校6年生の不登校児童数の約3倍が中学校1年生の不登校生徒数となっていて前年度の2倍を越えている。いわゆる「中1ギャップ」の問題は依然深刻な状態が続いている。中学校1年生で不登校となっている生徒は、小学校の時から不登校経験やその予兆があったことがわかっている。そのため学区内の小学校と中学校が連携して不登校問題に取り組むことはとても重要になっている。

所沢市不登校児童・生徒数

小学校		H18 年度	H19 年度	H20 年度	H21 年度	中学校		H18 年度	H19 年度	H20 年度	H21 年度
児童 数	男子	34	37	37	37	生徒 数	男子	161	112	113	137
	女子	42	44	40	22		女子	154	154	153	135
	合計	76	81	77	59		合計	315	266	266	272

不登校のきっかけを見ると、病気、家庭環境、友人との関係、学業などさまざまな要因がある。それらは単純ではなく、互いに複雑に絡み合っていることも考えられる。

所沢市不登校児童・生徒の要因

本人に係る要因	小学校	中学校	学校に係る要因	小学校	中学校
病気による欠席	8.0	7.2	いじめ	1.2	1.9
その他本人の問題	31.0	38.6	友人との関係	7.9	15.5
合計	39.0	45.8	教師との関係	2.0	0.7
家庭に係る要因	小学校	中学校	学業の不振	4.1	7.3
家庭環境の変化	10.7	3.5	クラブ・部活動不適應	(0.0)	1.8
親子をめぐる問題	12.1	6.7	学校のきまりをめぐる	0.9	3.9
家庭内不和	4.9	3.4	入学・編入学不適應	2.2	2.7
合計	27.7	13.6	合計	18.3	33.8

そこで、不登校傾向の児童生徒が抱える問題を探り、その児童・生徒の感情・気持ちに寄り添い、どうしたら登校できるようになるか不登校防止策を考え個別支援計画を立てる。そのための一つの方法として、本研究ではマッピングを取り入れる。この方法は不登校傾向の児童生徒が、不登校に陥らないようにするための今までにない新しい方法である。このマッピング法を通して個別支援計画を作成し実践すれば、その児童・生徒に向き合い不登校防止の成果が上がることを期待できる。今年度は、『市内小中学校の不登校ゼロを目指す ～校内組織でのマッピングを活かした個別支援計画の作成～』を本研究の主題として設定した。児童・生徒を一人でも多く学校復帰に導きたい。

III 研究の内容及び方法

1. マッピングを活かした個別支援計画の作成

児童・生徒の不登校の要因はさまざまであり、より多様化の傾向が見られてきている。こうした社会背景の中、より児童・生徒の心の内面に触れ、支援者自身が児童・生徒自身の心の中を理解することが大切であると考えた。そこで本研究部では、不登校児童・生徒の心のモヤモヤや深層心理を雲に表し、図式化することで不登校の要因を探り、支援方法を考えていく、マッピングを活かした支援方法を行うことが大切ではないかと考えた。

そこで、マッピングを活かした支援方法を活用する場として、今年度は、小学校高学年、中学校において支援方法を考えることとした。そして、マッピングを活かした支援計画を立て、実行することで、従来までの支援方法と比較し、マッピングのよき課題を明確にし、児童・生徒の変容を追っていくことが大切であると考えたのである。

2. マッピングを生かした個別支援計画の作成の手順

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 事前準備(2) マッピング法による児童・生徒の理解<ul style="list-style-type: none">①事例の黙読とチェック②不明な点の質疑応答③模造紙に本人のイメージを雲の形で書く。(3) 支援方法の検討<ul style="list-style-type: none">①付箋法②支援方法の決定③支援の分担③留意点 |
|--|

以下に、具体的方法を示す。

(1) 事前準備

- ① 事例 (A4 1枚程度)
 - 【内容】ア 本人の年齢性別 イ 家族構成 ウ 欠席の状況 エ 本人の行動や様子
- ② 道具の準備 模造紙 ペン (3色) 付箋 (3色)
- ③ 研修参加者 担任、対象児童生徒のキーパーソン、教育相談主任
メンバーの人数は、3～4名程度、多い場合は複数グループにする。

(2) マッピング法による児童・生徒の理解

- ① 事例を黙読。その際、以下の作業を行う。
 - ア 本人が困っていることや改善点、課題について 青色の線を引く
 - イ これまでの対応でやってきたことについて 赤色の線を引く
その際に、その対応が効果的だったものには○、効果的でなかったものに▲を書き入れる。
 - ウ 事例提供者に聞いてみたいことについて 緑色の線を引く

② イ 不明瞭な部分の質疑応答

事例提供者は参加者から質問をうける。(但し、事実確認のみとする。)

③ 本人の気持ちをイメージして模造紙に雲の形で書いていく。

ア 青マジックで本人の現状、困った事を書いていく。

例えば、学校に来た時の様子、登校した時にどんな場面つまづくか。

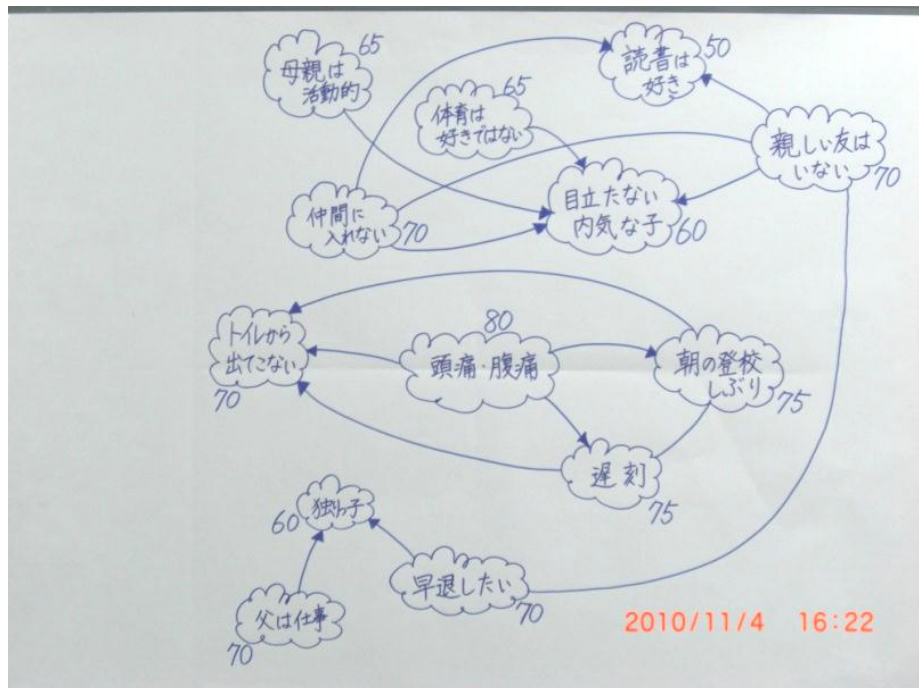


イ 本人にとって状態を点数化する。最高に高いところが100点とし最悪な状態まで書く。



ウ 雲同士の所で関連している所を線で結ぶ。

点数が高いところから低いところへ矢印を付ける。矢印がたくさん出ているところに注目し、矢印が出ている所に問題が多く、アプローチの手がかりになる。



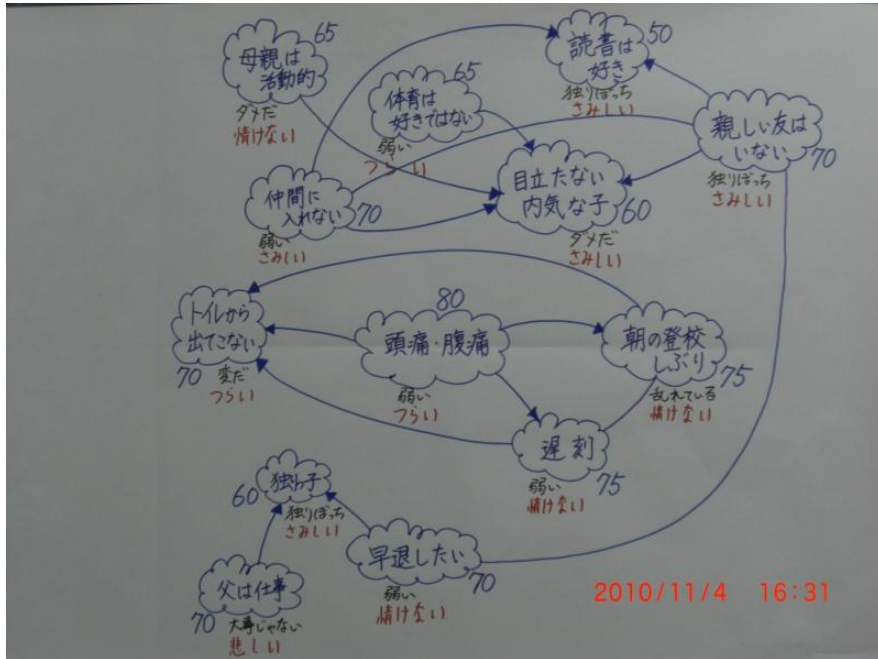
エ 黒マジックで、端的に自分が自分をどうとらえているか客観的なイメージを書く。この際、感情は入れない。ぼくは、私はどんな状態なのかをイメージする。

- 例・ぼくは普通だ。 ぼくは孤独だ。 ぼくは関心がない。 ぼくは息がつまりそう。
 ・ぼくは乱れている。 ぼくは面倒くさい。 ぼくは不幸せ。 ぼくは苦だ。
 ・ぼくはダメだ。 ぼくは悪い。 ぼくは価値がない。 ぼくは独りぼっち。
 ・ぼくはだらしが無い。 ぼくはつらい。 ぼくはばかだ。 ぼくはのろまだ。
 ・ぼくは弱い。 ぼくは自分勝手だ。 ぼくは嫌われ者だ。 ぼくは体が弱い。
 ・ぼくは大事にされていない。 ぼくは落ちこぼれだ。 ぼくはみんなについていけない。
 ・ぼくは見捨てられている。 ぼくはいじめられっ子だ。



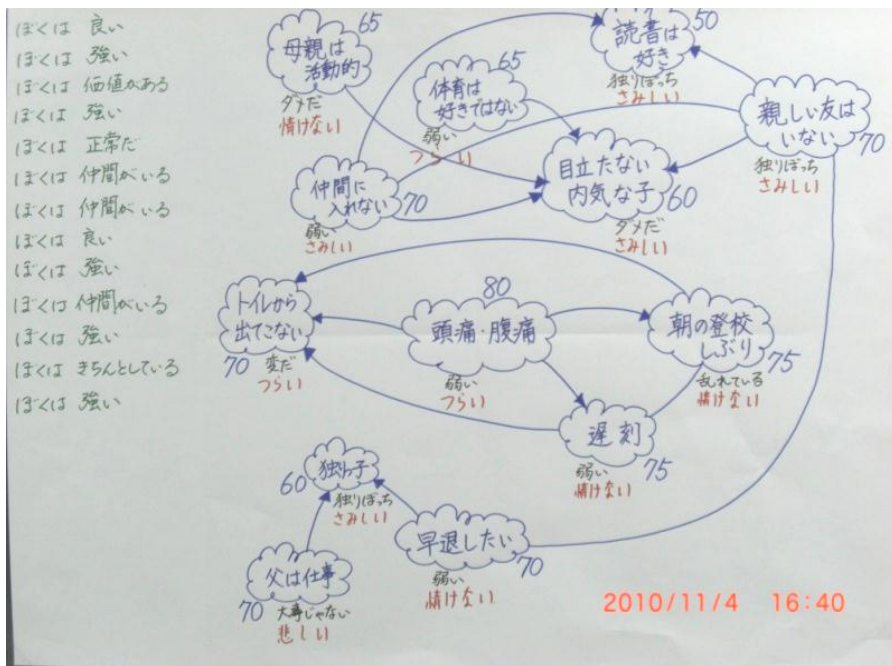
オ 赤マジックでその時、ぼくにわき上がる感情を書く。

- 例・ぼくは悲しい。 ぼくは情けない。 ぼくはドキドキ。 ぼくは怖い。 ぼくは嫌だ。
 ・ぼくはさみしい。 ぼくは面倒くさい。 ぼくはイライラする。 ぼくはうざい。
 ・ぼくはしょうがない。 ぼくはやばいな。 ぼくは苦しい。 ぼくはつらい。
 ・ぼくは不安だ。 ぼくはくやしい。 ぼくはむなしい。 ぼくは心配だ。
 ・ぼくはやるせない。



カ 緑マジックで黒マジックとは反対の事、なりたい自分を書く。

- 例・ぼくはこうしたい。 ぼくは自信がある。 ・ぼくはしっかりしている。
 ・ぼくは愛されている。 ぼくは強い。 ぼくはひとりじゃない。 ぼくは負けない。
 ・ぼくはできる。 ぼくは天才だ。 ぼくはすごい。 ぼくは人気者。 ぼくは素早い。
 ・ぼくはきちょうめんだ。 ぼくは友だちが多い。 ぼくはうれしい。 ぼくは正しい。
 ・ぼくは大事にされている。 僕は大事にされている。 僕は元気だ。
 ・ぼくは立派だ。 ・ぼくは優秀だ。 ・ぼくは楽しい。 ・ぼくは満たされている。
 ・ぼくはしっかり者だ。 ・ぼくは強い人間だ。



(3) 支援方法の検討

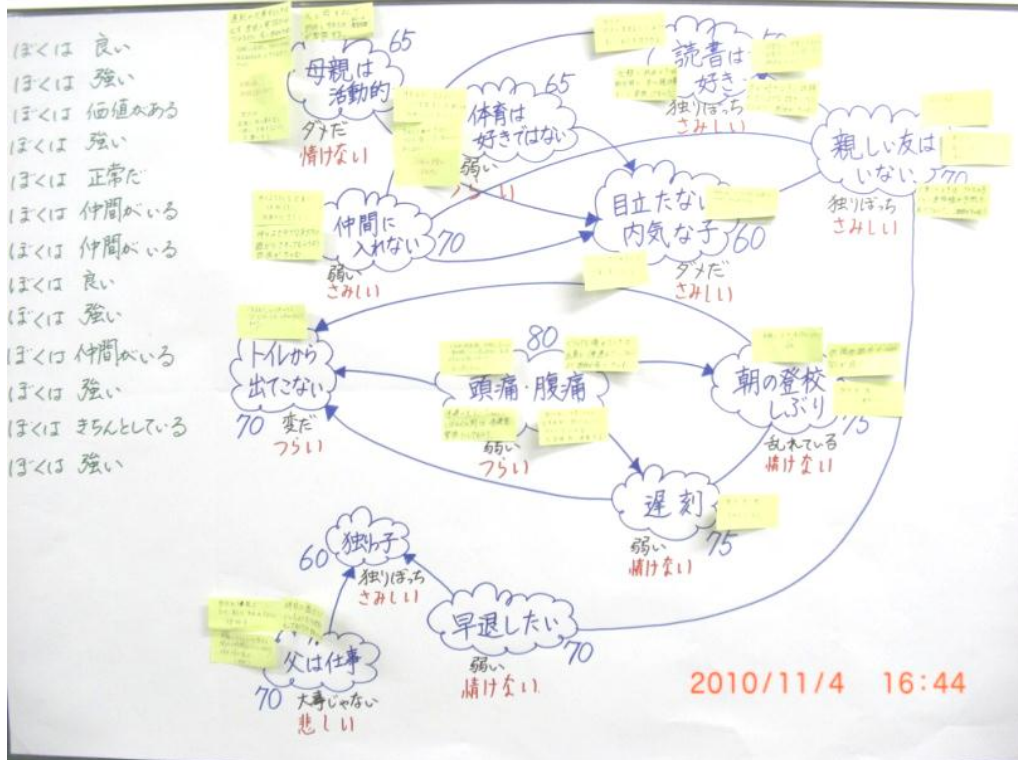
① 付箋法

ア 何ができるか支援の方法について具体的に考え黄色い付箋を貼っていく。

(人グループ3~4人の場合は一人10枚程度)

【注意】・ 本人になったつもりで、困った立場で考える。・ 当事者の教師になった立場で考える。・ これからどうしていくかという視点で考える。

例 ・ ~先生に~をしてもらう。・ 母に~をしてもらう。・ 相談員さんに~をしてもらうなど・ 担任に偏らず、多くの人が支援できるように考える。



イ 自分の書いたもの以外で、効果があると思う支援方法にピンク色の付箋をはっていく。多くピンクの付箋が貼られた箇所に注目する。



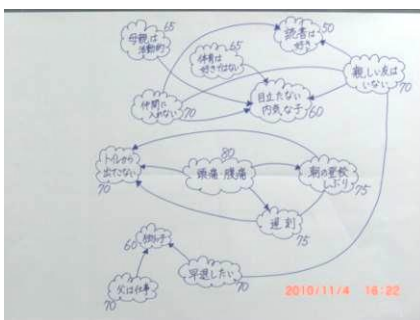
② 支援方法の最終決定担任が行う。

③ 支援の分担

支援方法で使えるような黄色の付箋をボードに貼る。誰が、どれ位の期間で行うか、具体的な支援方法を計画していく。2週間位の短期間で行う。(2週間スパン)

④ 支援の留意事項

- ・関わりのある先生の中で、チームの誰が直接支援していくか決めていく。
- ・つらい子は雲がたくさんある。当事者のつらさを理解していく。
- ・雲は、入園、入学当時のことなど、状況をふくらませて書く。
- ・相談員さんなどを交え、出来るだけ教員だけでは行わない方がよい。
- ・誰がどんな方法でどれ位の期間で支援をしていくか明確にする。
- ・うまくいかなかった事はやめ、効果のあるものは続ける。2週間くらいでアレンジし変更していく。



3 研究の経過

- ・ 平成 22 年 5 月 14 日(金) 第 1 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
委嘱状交付式・合同研修会
- ・ 平成 22 年 5 月 24 日(月) 第 2 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
研究のテーマ・内容についての話し合い
- ・ 平成 22 年 6 月 22 日(火) 第 3 回研究協議 【会場】 所沢市立生涯学習推進センター
東京学芸大学 小林正幸教授と研究の方向性についての話し合い
マッピングについて学習する
- ・ 平成 22 年 7 月 6 日(火) 第 4 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
合同研修会
- ・ 平成 22 年 7 月 13 日(火) 第 5 回研究協議 【会場】 所沢市立生涯学習推進センター
研究内容についての話し合い
- ・ 平成 22 年 7 月 22 日(木) 第 6 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
マッピング研修 (小学校児童の架空事例)
- ・ 平成 22 年 8 月 5 日(木) 第 7 回研究協議 【会場】 所沢市立生涯学習推進センター
マッピング研修 (中学校生徒の架空事例)
- ・ 平成 22 年 9 月 6 日(月) 第 8 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
実践研究の日程決め・研究紀要原稿についての話し合い
- ・ 平成 22 年 9 月 29 日(水) 第 9 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
実践研究の打ち合わせ・研究紀要原稿についての話し合い
- ・ 平成 22 年 10 月 15 日(金) 第 1 回実践研究 【会場】 所沢市内小学校
マッピングによる事例研究
- ・ 平成 22 年 10 月 18 日(月) 第 10 回研究協議 【会場】 東京学芸大学
小林正幸教授と研究内容についての確認
- ・ 平成 22 年 10 月 26 日(火) 第 2 回実践研究 【会場】 所沢市立内中学校
マッピングによる事例研究
- ・ 平成 22 年 11 月 4 日(木) 第 11 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
マッピングの写真撮影・研究紀要原稿についての話し合い
- ・ 平成 22 年 11 月 10 日(水) 第 12 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
研究紀要原稿についての話し合い
- ・ 平成 22 年 11 月 30 日(火) 第 13 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
研究紀要原稿についての話し合い
- ・ 平成 22 年 12 月 8 日(水) 第 14 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
研究紀要原稿についての話し合い・まとめ
- ・ 平成 22 年 12 月 27 日(月) 第 15 回研究協議 【会場】 所沢市立教育センター
研究紀要原稿についての話し合い・まとめ

IV 事例研修

1 小学校マッピング研修会

(1) 日程 平成22年10月15日(金)

(2) 参加者 校長、教務主任、養護教諭、担任、教育相談部員4名、コーディネーター
計9名

(3) 事例

高学年の女子。今年度から転校をしてきた。性格は、内気、意志もあまり強いとは言えない。しかし、頑固なところもあり、嫌なことはかたくなに拒む。転校してきてから、女子の友だちができ、協力してくれている。学力としては、能力的には普通だが、休みが多いことから遅れがある。運動も嫌いではないようで、休み時間には外に出ることも多かったが、最近は友だちの輪の中に入ることに抵抗があるようだ。行動は遅いというわけではないが、みんなの後ろからついていくタイプ。忘れ物や宿題は持ち帰っていけばきちんとやってくる。

欠席数は、前学校で1年生0日、2年生11日、3年生7日、4年生14日。本校での欠席は以下のようになっている。

月	4	5	6	7	9	10
欠席数	0	4	4	8	13	7/10

母親は、欠席をさせることに抵抗感がなく、本人の言われるがままに、休ませているように思われる。妹も休みが多く、姉妹で揃って休むことが多々ある。連絡がなく、理由も信用性が低い。

家族構成は、両親が離婚をし、母子家庭。母親は帰りが遅く、お腹がすくと自炊し待っている。母はさっぱりとした性格で、言うことは厳しい。ルーズな印象を受ける。給食費などの支払いが滞ることが多い。

7月の末に男子と女子の間でトラブルが発生した。原因としては双方にあり、話し合いをして互いに謝ることで解決を図った。男子も女子も共に関係する児童が謝罪をする中で、Aさんだけが謝ることができない。納得できない男子が悪口を言ったり、A菌と言った遊びを始めたりしている。

学習に対しては個別指導や、補習等を行っている。生活では、女子同士で関わりが持てるように会話に参加させたり、場を設け交流させたりしている。

男子と女子のトラブルに関しては、数カ月が経ってしまい、本人としては、解決をしたいという気持ちはあるが踏み出せない現状から、手紙を書き、担任が代読するという話で話し合いをしたが、また休み始めてしまった。

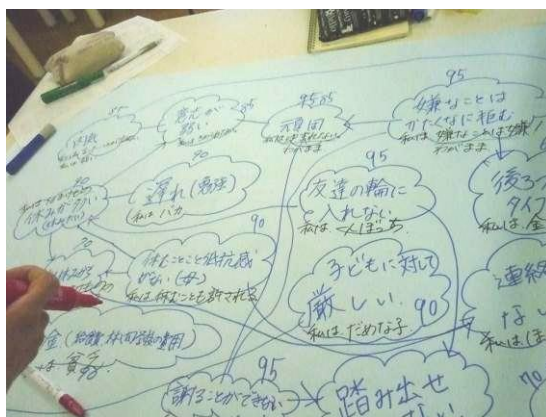
(4) 研修の様子

①マッピングの結果 (2グループ:太線の上下)

現状・困ったこと	点	客観的イメージ (私は～)	感情	なりたい自分 (私は～)	支援の方法
親がルーズ	70				
母の帰りが遅い	70				
意志が弱い	60	ダメだ	情けない	優秀だ	
休みが多い	50	ダメだ	楽ちん		養護教諭が本音を聞く
友達の輪に入れない	80	一人ぼっち	さみしい		
頑固	60	頑固だ		素直だ	
嫌なことを かたくなに拒む	60				担任・学主・相談員 が話を聞く
後ろからついてい くタイプ	50				
忘れ物・宿題	50				
悪口	90	嫌われている	悲しい	人気がある	男女が協力するレク
謝ることができない	60	ダメだ	情けない		謝る練習
何となく一日を過 ごしている	50				得意なことを見つ ける
内気	85	弱い	悲しい・悔しい	強い	
休みが多い・休みたい	90	なまけもの	情けない	がんばりや	
母子家庭	70	恵まれていない	さみしい	恵まれている	事務の協力
長女のプレッシャー	90	母の代わり	さみしい	可愛がられている	相談員さん
意志が弱い	85	決められない	弱い	強い	
勉強の遅れ	90	バカ	悔しい・悲しい	天才	担任の支援
休むことに抵抗感 がない母	90	見放されている	悲しい	見守られてい る	
妹も休みがち	70	なまけもの	情けない	活発な妹がいる	
お金	90	貧乏	さみしい	金持ち	校長・事務の協力
頑固	85	わがまま	情けない 可愛くない	心が広い	道徳の充実
友達の輪に入れない	95	一人ぼっち	さみしい	友達が多い	レク・ソーシャルスキル
子どもに対して厳しい	90	ダメだ	悲しい・悔しい	いい子	
踏み出せない	85	弱い	情けない	強い	
嫌なことを拒む	95	わがまま	情けない	心が広い	
後ろからついていくタイプ	60	存在感がない	情けない	リーダー	
叩く・蹴る	70	乱暴	可愛くない	優しい	友達との付き合い 方を教える

②研修の実践から

- ・熱心なあまりに内容が多く、それぞれの作業で時間がかかってしまった。方策までに約1時間かかり、十分に協議できなかった。
- ・2グループで作業をしたが、本人に近い立場と、そうでないグループに分かれたために、協議が難しいという声が出てしまった。



参加者の感想・意見

- ・子どもの視点から考えることができる。
- ・組織でその子を見つめるよい機会になる。
- ・言葉（特に客観的なイメージと点数）を書くのが難しい。
- ・体制を整え、今後のことを考えることができる。
- ・図式化してわかりやすい。
- ・他の先生の考えがわかり、参考になる。
- ・固い雰囲気では行わないほうがいい。
- ・思っていたことを図に表したことで、子どもの立場が理解でき、プラス面もマイナス面もイメージだけで行動していたことを反省した。
- ・不登校以外の事例でも使えるような方法だ。（特にいじめ）
- ・子どもがやってみても効果があるかもしれない。
- ・多方面から考え、問題や課題を一本化することができることはいいことだ。
- ・有効的な手段。
- ・共通理解が図れる。
- ・経験が浅い先生ほど参加することで、得られるものが大きいだろう。
- ・だれでも参加し、数人で取り組める。

(5) 経過

マッピングを終え、担任としては、以下の方策を選んだ。

①クラスで楽しめるレクをする。

- ・手つなぎ鬼ごっこ
→ 先月よりも登校する数が増えた。

②友達との付き合い方を教える。

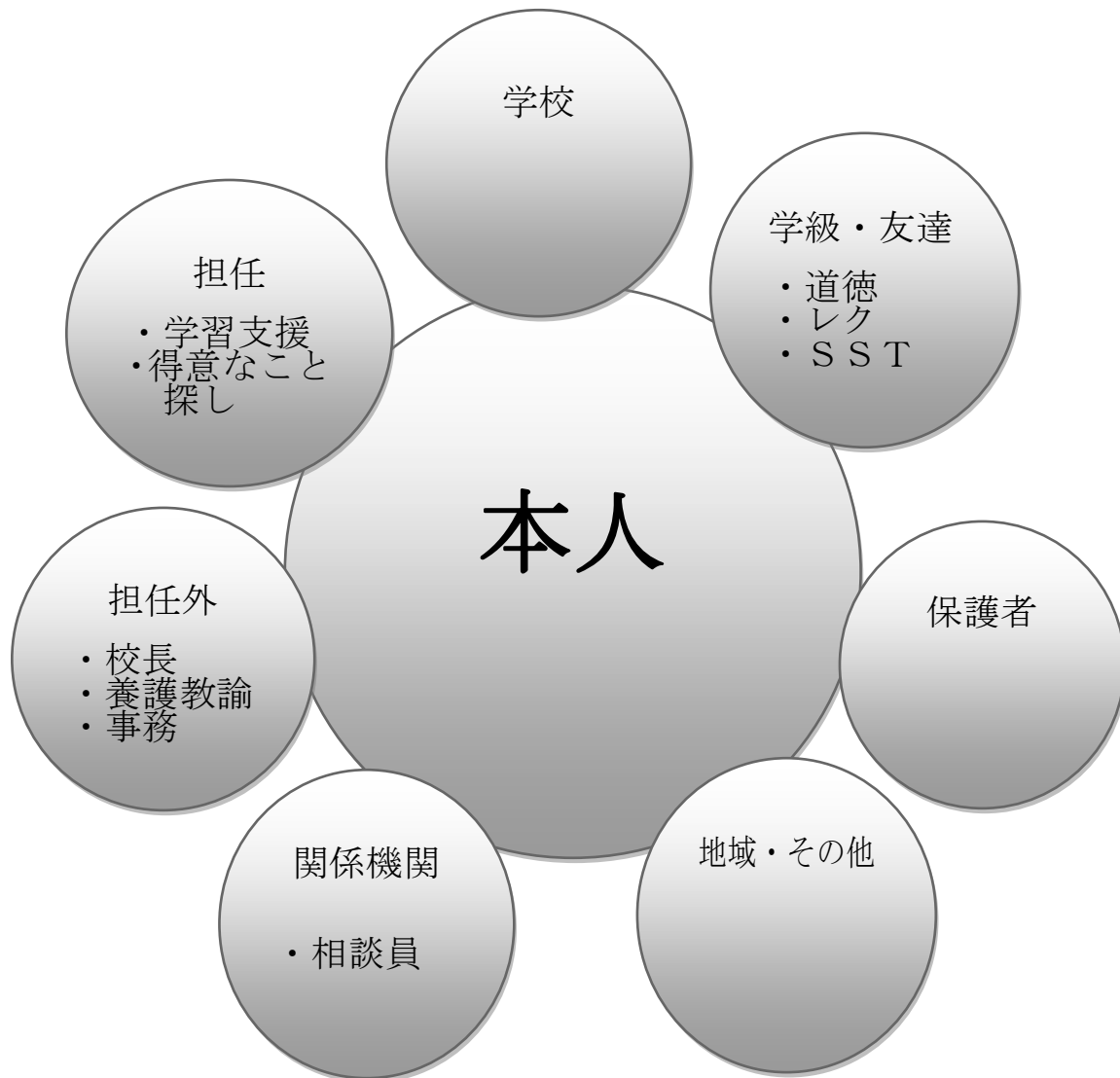
- ・「自分から勇気を出して仲間に入ろう」「学校に来ることで、友だちが増えたね」などの言葉がけをした。
- ・保護者からも同じように声かけをしてもらう。
- ・生活態度や学習など、やるべきことに対して自覚を持つように促した。
→ 遊ぶ約束をすることが増えた。

③担任、学年主任、養護教諭、相談員などの関係者で話を聞く。

※ 今後、実施の予定

(6) セブクロス法による方策の分析

具体的に挙げられた支援方法を、7つのカテゴリー別に分類することをセブクロス法という。分類をすることで、誰が、どのような役割を果たせばよいのかが明確になる。当研究部では、支援に携わる関係者の分類として、学校、担任、学級・友達、保護者、担任外、関係機関、地域・その他の7つをカテゴリーとして定めた。事例で挙げられた支援方法を当てはめると、以下ようになった。



この支援方法を実践、評価し、有効であったものをさらに7つ挙げ、順位づけをする。そして、1つの事例だけでなく、その他の様々な事例の中で上位に入った支援方法を収集・整理することで、数々の支援方法を知ること、事例に合わせた効果的な方策を知ること、一般化されることが望まれる。

担任だけでなく、さまざまな立場の人が関わりながらチームとして対応していくことで、担任一人だけの負担にならないようにする。

2 中学校マッピング研修会

(1) 日程 平成22年10月26日

(2) 参加者 教育相談主任 特別支援コーディネーター 養護教諭 相談員
学年主任

(3) 事例

中学生
家庭環境 母（無職） 姉・弟
出席状況 今年度 欠席61日 遅刻31日 早退30日
本人の状況
<p>昨年7月頃から欠席が続くようになった。学力的に厳しい状況が見受けられ、読み書きが苦手で漢字は小学校低学年程度。言葉の意味を理解できないことも多い。英語はスタートしたばかりで、よく分かるようである。とても内気で友達と自分からコミュニケーションが取れず、仲の良い友達も少ない。部活にも入っておらず勉強も難しいことから、登校意欲がなくなった。</p> <p>本年度もクラスに入ることができなかったが、遅刻・早退ではあるが、相談室に少しずつ登校することができるようになった。登校時は自分で用意した勉強（漢字や計算問題）に取り組んでいる。行事の時などは、クラスの友達から手紙をもらい喜ぶ姿も見られ、休み時間等、クラスの友達とも会えるようになった。しかし、会話は、友達から質問されたことに「うん」と、首を振る程度で、なかなか自分の思ったことを伝えられていない。家では生活リズムが乱れ不規則な生活をしており、朝起きるのも遅いことが多い。家族と過ごしているときには、本来の自分が出せるようで、大きな声で会話もできる。反抗期にも入り、親・弟に対し乱暴な言葉を言うこともある。</p>

(4) 研修の様子

①マッピングの結果

	現状・困ったこと	点	客観的イメージ	感情	なりたい自分
1	自分の気持ちをうまく伝えられない	80	僕は 孤独だ	淋しい・悲しい	僕は いまやつ
2	授業でいつあてられるか不安	90	僕は ダメだ	情けない・ドキドキ・怖い	僕は 自信がある
3	言葉がわからない	80	僕は ダメだ	嫌だ	僕は できる
4	漢字小1くらいの程度	80	僕は ダメだ	情けない	僕は できる
5	数学がわからない	30	僕は ダメだ	情けない	僕は できる
6	運動が嫌い	50	僕は 関心が低い	別に〜	僕は 興味がある
7	姉がずっと家こいる	80	僕は 息がつまりそう	イライラ	僕は のびのび満足
8	母と姉が仕事についていない	20	僕は 息がつまりそう	イライラ	僕は のびのび満足
9	母親がうざい	90	僕は めんどくさい	ウザい・イライラ	僕は 感謝できる
10	姉が父親かわり	70	僕は 不幸せ	悲しい	僕は 幸せ

	現状・困ったこと	点	客観的イメージ	感情	なりたい自分
11	母が厳しい	90	僕は 不幸せ	ウザい・イライラ	僕は 幸せ
12	部活に入っていない	3	僕は 当たり前	しょうがない・別に～	僕は 考える
13	外出が多い	5	僕は 当たり前	ま、いっか	僕は 考える
14	困っていることを伝えられない	80	僕は 弱い・不安だ	悲しい・情けない	僕は 強い
15	口数が少ない	50	僕は 孤独だ	淋しい	僕は 人気者
16	友達少ない	60	僕は 一人ぼっち	淋しい	僕は 友達が多い
17	母親に困っていない感じ	5	僕は 楽だ・苦だ	しょうがない	僕は 苦しい・幸せ
18	母親が代弁する	50	僕は 楽だ・苦だ	しょうがない・ま、いっか	僕は 苦しい・幸せ
19	母がコントロールしている	70	僕は 楽だ・苦だ	しょうがない・いやだな	僕は 苦しい・幸せ
20	家庭内暴力	50	僕は 悪い	スッキリ やばいな	僕は 良い

② 支援の方法

本人への支援方法

支援者	具体的な内容
相談員	コミュニケーションカードなどを用いて、うまくコミュニケーションが図れるように練習する
担任	1日ノートを活用。優しい日本語を使う
授業中	当てるときは事前に知らせておく
クラス友達	グループなどで声をかける
クラス友達	毎日の連絡カードや手紙を届けに行く
クラス友達	授業や給食へ誘う
英語教諭	わからない時には英語で通訳する
英語教諭	英語の力を引き出す
体育教諭	興味のある運動の話をしたり気持ちを持たせるようにする
国語教諭	言葉や漢字の補修をする
国語教諭	プリントを作る
数学教諭	継続的に学習ノートを通して勉強をみる
数学教諭	話の内容をわかりやすく、図や漫画形式で本人の気持ちを引き出す
数学教諭	小学校からの復習から少しずつ家でもできる宿題を出す
数学教諭	小学校のドリルからやり直して学習できるようにする

母への支援方法

教育センター相談員	教育センターの相談を勧める
コーディネーター	何を困っているのか、何を望んでいるのか具体的に話をする
コーディネーター	母の就職について話をする
コーディネーター	母親の影響力を減らす（スッキリさせる）
校長	今後のことについて話をする

③ 研修の実践から

- ・本人を知っている教員が多く、具体的な内容が挙げられていた。
- ・本人を知っているだけに、適切な言葉を見つけるのに深く考え時間がかかった。
- ・さまざまな立場の教員がいるために、いろいろな方向から考えることができた。
- ・時間的に1時間では厳しい研修のように思われる。

参加者の感想・意見

☆良かった点

- ・雲をつくって文字にしていくと子どもに接している側の頭も整理できる。
- ・子どもの気持ちになって考えられることができる。
- ・自然に意見を出せた。
- ・本人だけでなくまわりの環境も深くつながっていることがわかる。
- ・たくさんの人で意見を出し合うので偏らなくてよかった。
- ・親子関係（母親像）がよくわかる。

★悪かった点

- ・本人をよく知らないとなかなか話に加われない。
- ・事例の文章だけでは読み取れない部分がある。
- ・今後の具体策がなかなか出せなかった。
- ・感情を入れなくて事実だけを記入することが難しかった。

☆改善点

- ・「なりたい自分」のところ、本人だけの状況でない場合、書きづらい。

僕は母親に感謝している。_____のような表現の方が適当ではないか。

(5) 経過

研修後、本人が再び登校できない状態が続いてしまった。しかし、家庭訪問では、本人と顔を合わせて会話ができなくても、紙に内容を書いたり質問したりすると、それには記述で答えてくれるようになった。また、運動が嫌いというのではなく、興味のあるスポーツには関心があることがわかり、その面から支援する方法が考えられる。友達とのコミュニケーションを多くする支援を更に進め、学習のみならず、コミュニケーションのスキルを図れる場面を多くしていこうと考えている。

V.研究のまとめと今後の課題

1 マッピング法の成果と課題

(1) 成果

① 問題点の明確化

今までの事例研究の方法で使用されていた A 方式、B 方式、S 方式などの既存の事例研究に比べ、現状や困ったことを雲に描き、このことについて本人がどうとらえているか、かつむことを大切にする。そこから本人のなりたい自分の像を整理することにより、問題点がどこにあるかが明確になる。

② 支援の方策の立てやすさ

不登校の児童・生徒の気持ちに成りきり感情を整理することにより、その子の気持ちを理解することが出来、不登校の背景に隠れている問題点が明らかになり、支援の方策が立てやすい。

③ 参加者のスキルの向上

経験や考えが豊富な先生を交えた話し合いにより、参加者のスキルも上がる。本人を取り巻く学校関係者や関係機関に関しても、現状を知ることでできる機会になり、共通理解ができ、組織的な活動ができる。

(2) 課題

① 誰でもできる実施方法の確立

事例研究を行う教師が、感情や状態を想像するイマジネーション力や多くのボキャブラリーを持ち合わせていないと、同じ様な言葉の表現に陥りやすく、その時点で時間を取られがちになり、支援計画の作成までスムーズにたどり着けない。今回の研究結果をもとに、研修会を開き、誰でもできる実施方法を市内に広げていくことが課題である。

② 参加者について

教師だけで行うと実際の経験や長年培った勘にたより、偏った感覚に陥りやすい面もある。そのためにも、教師以外のスクールカウンセラーや相談員さんなども交え、一緒に事例研究を行うことが望ましい。

2 個別支援計画の作成の成果と課題

(1) 成果

① 校内組織でのチームの具体的な支援策

できるだけ多くの支援策を考えることで、チームとしてのより具体的な支援策が見つかる。また、担任以外の多くの教員や様々な人が具体的な支援を行う事で担任自身の負担が少しでも減少する事になり、担任自身にも心の余裕ができ、次の解決に向けての支援策につなげることができる。

② 短期間での支援計画の検討

実際の支援の方法が挙げられたら、担任がその中からできそうな事を選択することで、無理のない支援が行われる事になる。同時に、2週間という短期間で支援計画を立てることにより、実際の方策の効果があれば継続、そうでなければ変更を検討するので、より解決に向けての支援策を立てやすくなる。さらに、よかった支援策を集め、「よかったねカンファレンス」としてその支援方法をストックしておき、次の支援につなげていく事を行えばより有効である。

(2) 課題

本人が登校しなければ、支援策を実施できないことが多い。早期の段階でマッピングを行い、適した支援を行う必要がある。

3 次年度へ向けて

不登校傾向の児童生徒が抱える問題を深く把握するためには、行動や現象のみならず、その児童生徒の感情や気持ちを考える必要がある。そのために本研究のマッピングを活用した支援計画の作成を、市内の教育相談主任や特別支援コーディネーター、相談員等の研修会などで広めていくことが重要である。さらに、校内のケース会議や事例研修でも実際に活用していく事で、不登校ゼロに少しでも役に立てればよいと強く考える。

参考文献

「学校でしかできない 不登校支援と未然防止」 小林正幸監修 早川蕙子・大熊雅士・副島賢和編 東洋館出版社 (2009)